

3 / 2 2 『イエスを否定する者たち』(マルコ14:53~72)

長谷川 望牧師

- * 受難週の木曜日。「祭司長と全議会はイエスを死刑にするために」(14:55)。ユダヤの指導者たちは最初からイエスを死刑にしようとしていた。そのために偽証をさせるのだが、一致しなかった。大祭司カヤパはイエスが何も答えないのを見て「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか」と聞いた。これにはイエスは「わたしはそれです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなた方は見るはずです。」(14:62)と答えられた。詩篇110篇とダニエル書7章に記されているメシヤ(=キリスト)は私のことであると宣言された。これを聞いて、大祭司は死刑にあたる罪とした。
- * ペテロは裁判が行われている大祭司の中庭まで入って、火にあたりながら、様子をうかがっていた。女中やその他の人たちに顔を見られ、イエスと一緒にいた弟子であることを見抜かれた。彼は、三度、イエスを知らないと言った。「すると、すぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らないと言います』というイエスのおことばを思い出した。それに思い当たったとき、彼は泣きだした。」(14:72)
- * このペテロの否みの物語は4福音書全部に記されている。主に絶対従います、知らないなどとは決して申しません、と言っておきながら、いざとなったら裏切ってしまったペテロ。他の弟子たちは、その前に逃げてしまっていた。人間の弱さが現れている。人への恐れ、自分の身に起こる危険への恐れである。
- * 大祭司や長老などの指導者グループや、彼らに従う役人や群衆は「イエスを信じないで否定」した人たちであったが、ペテロは「信じていても否定」してしまった人である。決してイエスに対する信仰を捨ててしまったわけではない。自分の信仰を表明しなければならない場面に立たされた時、口から出たことばは心の中とは違ったのである。
- * 私たちはどうだろうか。少なくとも「信じないで否定する者」ではない。しかし、日常生活の中で「信じていても否定している」ことがないだろうか。「隠れキリシタン」になっていないだろうか。そして、何等かの形で信仰を妨害されたり、迫害に会っても信仰を告白できるだろうか。今後、そのような時が来ないとは限らない。
- * 鶏が鳴いたとき「主が振り向いてペテロを見つめられた。」(ルカ22:61)とある。そのまなざしは憐れみに満ちたものだったと思う。イエスに自分の心を見透かされて、後悔した。そんなペテロのために、主イエスは十字架に付かれたのではないか。彼よりももっとも弱く私たちのために、主イエスの十字架がある。